

三角と四角

巖谷小波

青空文庫

数学の中に幾何うちというものがある。幾何を学ぶにわ、是非とも定木じようぎが入る。その定木の中に、三角定木というのがある。——これわ大方諸君みなさんも御存じでしょう。

ところがこの三角定木、自分の体にわ、三方に尖とがった角のあるのを、大層自慢に致し、世間に品も多いが、乃公おれほど角のあるものわあるまい、角にかけてわ乃公が一番だと、たった三つよりない角を、酷ひどく鼻にかけておりました。

すると或ある日、同じ机の上にあつた鉛筆が来ていうにわ、

(筆) 三角さん三角さん、お前ふだんわ平常から大層その角を自慢しているし、私わしらもまたお前ほど角の多いものわないと思つていた

が、この間来た画板がばんを見たかい。あれわお前よりまた角が多いぜ。

と、いいますから、三角わ少し不平の顔色で、

(三) ナニ僕より角の多い奴やつがおる。馬鹿いい給たまうな。凡およそ世界わ広しといえども、僕より余計に角もつを持た奴やつわなはずだ。

(筆) とところがあるから仕方がない。

(三) ナニそれわ君達らの眼が如何どうかしてるのだ。

(筆) ナニ如何どうも仕てるものか、嘘うそだと思おもうなら行いって見給たまえ！

(三) そんなら行いって見よう。嘘うそだったら承知しないよ。

(筆) いいとも嘘うそなら首くびでもやるワ。

と、これから連れ立たって行いて見みますと、なるほど画板がばんわ真まッ四角

で、自分よりわ一角多く、しかも今まで自分を褒めていた連中が、今でわみんな画板の方ばかり向いて、頻りにその角を褒めている様子です。

(筆) どうだい嘘じやあるまい。

(三) なるほど此奴わ恐れ入た。

と、さすがの三角定木も、こうなると頭を搔くより他わありません。大いに面目を失いましたが、しかし心の中でわ、まだ負けしみという奴があつて、おのれ生意気な画板め、余計な角を持て来やがつて、よくも乃公に赤恥をかかせやがつたな。どうするか覚えていると、果わ悔しまぎれに良くない了簡を起しました。

で、そのまま帰ると、直ぐに近所の鋏の処え参り、

(三) 鋏君、申もうしかね兼かねたが今夜一ト晩、君の体を貸してくれまいか。

鋏わこれを聞いて、

(鋏) なるほど、次第によつてわ貸すまいものでもないが、一体何を切るのだ。

(三) ちつと硬かたいものを切りたいのだが、よく切れるかい。

(鋏) 大抵なものなら切きて見せるが、それでも六むずかしいと思つたらまア一遍磨といで行くさ。

(三) そうか、そんなら磨がしてくれたまえ。痛かろうけども頼まれたが因果だ、ちつとの間辛抱頼む。

と、これから三角定木わ、件くだんの鋏をば磨ぎ立てまして、もうこ

れならば大丈夫と、その日の暮れるのを、今か今かと待ちかまえておりました。

その中に日も暮れて、夜も更ふけて、四隣あたりも寢静やすまつたと思う頃、三角定木わムクムクと床を出て例の鋏はさみをば小脇こわきにかかえ、さし足ぬき足で、彼の画板かの寢ている処ところえ、そつと忍んで参りました。

見ると画板わ、前後も知らぬ高たかい 軒びきで、さも心持快よさそうに寢ておりますから、×《し》めた！ おのれ画板め、今乃公おれが貴様の角を、残らず取り払ってやるからにわ、もう明日あしたからわ角なしだ、いくら威張つても追い付かんぞと、腹の中で散々悪態を吐つきながら、突然チヨキリ！ 一角切きつて落しましたが、まだ気が付かない様子ですから、また一角をチヨキリ！ それでも眼めが醒さめ

ないから、こりやよくよく寝坊だわい、といいながら、チヨキリ！ チヨキリ！ とうとう四角とも切り落し、まずこれで溜りゆうい飲んが下がった。どりや帰って寝よう、鋏はささん大きに御苦労だつたと、急いでわが家やえ帰って、そのまま寝てしまいました。

さてその翌朝、何喰くわぬ顔で床を出て見ますと、世間でわ大評判で、逢あう者ごとに、

「画板えびたわえらいえらい。」

と、頻しきりに画板を褒め立てますから、如何どうした事かいと行いて見ますと、こわいかに、昨日まで四角であつた画板えびたわ、今朝けさわ八角に成つて、意気揚々と歩ある行いております。

四角の角々を切り落せば、角の数が倍になって、八角に成るの

わ^{あたりまえ}当^然、しかもそれわ自分の所業^{しわざ}であるのに、そうとわ心付

かぬ三角定木、驚いたの驚かないの！

(三) ヒヤーこりや如何^{どう}じや。アノ四角奴^め、一夜^{うち}の中に八角に成

りよつた。この分^{ぶん}でわまた明日わ、十角や二十角にも成るだろ

う、こりや所詮^{しよせん}叶^{かな}わぬわイ。

と、とうとう兜^{かぶと}を脱いで降参^{かくだま}しましたとわ、身のほど知らぬ大^{おお}

白痴^{わけ}。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（上）」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

底本の親本：「小波お伽百話」博文館

1911（明治44）年1月初版発行

初出：「幼年雑誌」博文館

1894（明治27）年10月号

※本作品は、作者が提唱した、発音どおりの仮名遣い「お伽仮名」によっている。1900（明治33）年から2年間、巖谷小波は、ベルリン大学東洋語学校で日本語を教えたが、その際の経験から、日

本語の仮名遣いは煩雑過ぎると考え、お伽噺を発音通りの仮名遣いで表記するようになった。初出時は歴史的仮名遣いで書かれていた本作品も、底本の親本に収録されるに際して、書きあらためられた。

入力：hongming

校正：門田裕志

2001年12月22日公開

2005年11月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

三角と四角

巖谷小波

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>